

I - (2) 製糸業

明治 10 年代以後の上州の製糸業の発展には大きくみて二つの傾向つまり商業資本家による管業製糸と養蚕農民による組合製糸との二つが指摘しうる、

オ II 章で実態調査の部に入る、

ここでは日本における養蚕学校の嚮矢といわれる高山社を中心とした村の養蚕のうごきを資料にもとずいてまとめた、

II - (1) 明治初年

(イ) 高山社の発生を詳しくみる、

(ロ) このころの養蚕は規模は小さかったが戸数の多寡程度 (明治 5 年) が行っている、

II - (2) 明治 10 年代～末年

(イ) 高山社の急激に発展していく株を地図、クラブなどにより眺める、

(ロ) 高山社と平行して村の養蚕も日本の全国的な興隆の波にのって発展する、

II - (3) 大正末期～昭和初期

(イ) 独占資本化した大製糸家におされて高山社が没落していく株をとらえる、

(ロ) この期は全国的にも村に於ても養蚕は衰退への一歩をふみ出すときである、

村に於ては桑園、収繭量にはそんなに変化はみられないが製糸場、産繭処理、蚕種製産人の変化が見られる事から、養蚕農民が大製糸業者に従属していく株が分る、

以後の動きはオ二部に於て扱われる、

戦後の開拓地、川辺開拓地の現状分析

—その発展過程を中心に—

常 田 秀 子

1. 目的

戦後開拓地の一つ、長野県小諸市西方の脚牧原上にある川辺開拓地の現状を主としてその発展過程を中心にして分析し、その地域性を評価しようとするものである、

2. 内 容

戦後の開拓は「食糧増産」「失業対策」という緊急を要する国家の政策として始められた。したがって、これは当面の問題打開策であり、次第に軽んじられてくる。このことは融資金の面に最もよく表われている。

川辺開拓地は、かつて湖であった所が隆起してできた神牧原台地の上にある。台地は二次ロームに覆われていて、比較的肥沃である。しかし台地であるため水に乏しく、しかも降水量は年々2,7mmしかなく旱魃度が酷い。台地の東北部には比高100~200mの断層崖があり、交通は不便である。昭和32年にバス道路が開闢されるまでは、出荷物の運搬等も多くは牛馬車によっていた。

開墾は23年から始まった。開拓地の面積は50ノ町、1戸当りは耕地面積15反、採草薪炭林地3反、計18反である。入植者27名の中、22名は地元の川辺村出身であるが、親元から援助を受けうる次三男入植者は僅かに2名であった。このように地元から援助を受ける者が殆んどなかったため、入植者間の結合が強く、共同の精神が発達している。これは等しく新しい開拓地であっても、次三男入植者の多い浅間火山の裾野上の駒ヶ原開拓地が、入植者相互の結びつきよりも親元との関係の方が深いのと好対称をなしている。この共同の精神は開墾の推進、融資金の償還等の面に於ても重要な役割を果たしている。

開墾進度は、上述のように殆んど者が生活の援助を受けえなかつたため、開墾ばかりしていることもできず、はかばかしくなかつた。しかし遅れている者の開墾は手伝ったりして、30年の成功検査までには、どうにか開墾を完了した。

作物は、開墾初期の23・24年に於ては、全く自給作物一色であつた。即ち、大小麦、雑穀、豆類、イモ類等であつて、入植者達はこれらを簡売して生活費の一部としたのである。その後、25年に国内産業がほぼ戦争の打撃から立ち直り、又朝鮮ファーム等の影響もあつて生活がいくらか繁になり、又開墾面積が増加したことなどによつて、川辺開拓地にも商品作物としてタバコ、ミフヨモギ、果樹等が採り入れられるようになり、今まで自給用であつた馬鈴薯、大根、大豆等が換金用の作物となつた。又、飼料用の作物が次第に採り入れられてくる。これに反して今まで重要な地位を占めていたアワ、キビ、ソバ等の雑穀が衰退した。土壌に恵まれていたため、反収も27年には殆んど既耕地と変わらず、順調に進んで来たが、28年から31年にかけて続いた冷害、凍害、旱害によつて進展は一時、大きく阻害された。

家畜についてみれば、初期のうちはやはり兎、鶏、山羊という小中家畜が
多かったが、厩肥の獲得、畜力利用の見地から27年に始まった中期家畜
資金の導入によって和牛が除々に増加した。32年、バス道路が完成すると
牛乳搬出が容易になり、そのため乳牛が増加しはじめ、反面、和牛の減少が
みられる。山羊は初期のうちから毛糸自給用として飼育されている。採草林
地、原野に恵まれ、一方、飼料を購入する経済的余裕もないことから、飼
料は殆んど自給している状態である。

現金収入は主として①馬鈴薯②大豆③タバコ④大小麦⑤大根によってもた
られ、その他、鶏卵、仔畜等の畜産物からも得られる。しかし、これらは
農業粗収入、年間20~30万という低さからもわかるように、きわめて僅か
なものである。そのため、営農資金を始め各種融資金が家計費に繰り入れら
れることが多い。

現在では政府資金は返済期に入っており、中金、県信連の少額のしかも短
中期の資金しか得られず、年々償還金の額がふえてゆくことは非常な問題で
ある。開拓者は長期資金の十分な融資を望んでいるのである。

以上に述べた作付作物、家畜の動向、収入源となる養畜産物などの点から、
川辺開拓地は旧農村と近代的農村の中間的な性格を占めるものと考えられる。
このような性格は商品経済の高度な発展の中に於てなされた開拓であること、
しかしながら、その地理的位置に恵まれていなかったこと等に基因するもの
であろうと思う。

明治前期那須野原の開墾

一那須開墾社の成立と解体

北 中 昌 子

栃木県那須郡那須扇状地の扇頂部から扇尖部へかけての地域＝那須野原は
従来充分開墾されず、一万余町歩の広大な荒野であった。その荒野も、明治
十年代から二十年代へかけて、地元農民や困窮士族によって、或は当時の政
府高官によって、あますところなく分割され、開墾に着手されたのである。

この論文は、その当時開墾に着手された中でも、最大の三千四百町歩を採
掘して、地元豪農を中心とする農民によって成立した、那須開墾社の成立か
ら解体の移行過程を中心に考察したものである。如何なる時代的変化が開墾